

入所児者の反応やサインを捉える実践の評価指標の開発

令和3年度 研究報告書  
(概要版)

令和4年3月

社会福祉法人 恩賜  
財団 済生会

済生会保健・医療・福祉総合研究所

研究員 吉田 護昭

## 目 次

第1章 はじめに	1
第2章 評価指標の説明	1
第3章 まとめ	5
謝辞	5
文献一覧	5

## 第1章 はじめに

どんなに重たい障害を抱えても重症心身障害児（者）施設に入所する重症心身障害児（者）（以下、「入所児者」）には意思がある。そのため、職員は入所児者の意思をくみ取って、入所児者の望む支援や意思に沿った支援をしていくために日々の実践を積み重ねている。つまり、職員は日々、入所児者の意思決定支援に携わっている。

入所児者の意思決定支援を行っていくには、入所児者の意思をくみ取るために、まず入所児者の反応やサインを捉えることが必要となる。しかしながら、入所児者は自らの意思を、自らの言葉で表出することが困難であったり、非言語による表出も微細であったりすることがある。このことから、職員は実践を行っていく中で、困難やわからなさ、迷いを抱えることがある。

入所児者の意思決定支援を行っていくプロセスのうち、職員が入所児者の反応やサインとその意味を捉える実践において抱える困難やわからなさ、迷いを少しでも解消でき、実践の支えになるものが必要ではないかと考えた。

そこで、本研究では入所児者の反応やサインを捉える実践に関する評価指標の開発を目指すこととした。

## 第2章 評価指標の説明

評価指標の作成には、筆者が2020年と2021年に実施した調査結果<sup>1,2)</sup>をもとに項目を作成した。評価指標の作成後、11名の調査協力者（2020年と2021年にインタビューを受けた重症心身障害児（者）施設で勤務する職員）とともに評価指標の項目について検討を行った。

評価指標（表1）は、入所児者の反応やサインを捉える実践として、9つの大項目と32の項目により作成した。大項目では、1. 専門職としての心得、2. かかわる前の情報収集、3. 働きかけ、4. アセスメントの準備、5. 留意点、6. 判断、7. 個々の特性、8. 情報共有、9. 記録とした。以下に9つの大項目について説明をする。

尚、9つの項目における定義は本研究における定義づけとして記載していることを予め断っておきたい。

### 2.1 専門職としての心得

「専門職としての心得」とは、入所児者とかかわるにあたって、支援する自身が専門職としての心得をもって、入所児者とかかわるということである。

まず、支援者は専門職としての価値でもある「入所児者をかけがえのない存在として捉える」ことを心得ておくことが必要である。そのうえで、「入所児者の意思を尊重する」ことや「本人の思いを中心に置く」ことを念頭において支援を始めることが必要となる。そして、その支援において前提となるのが、入所児者がどのような生活や支援を望んでいるか、「入所児者の望みを知っている」ことが必要となる。

## 2.2 かかわる前の情報収集

「かかわる前の情報収集」とは、日勤や夜勤、早出、遅出など、どのような勤務体系であろうとも、入所児者とかわる前には、事前に入所児者の情報を自ら収集して、かわりを始めることである。

どのようなツールによって情報を収集しているかは、「電子カルテから収集している」、「施設独自の記録物から収集している」、「口頭（申し送りなど）から収集している」とした。そして、それらから得た情報については「収集した情報に疑問をもつようにしている」ということから、これまで自身で実践して得た情報とのすり合わせを行う作業でもあることとする。

## 2.3 働きかけ

「働きかけ」とは、支援者が入所児者に対して、声かけや体に触れるなど、入所児者の反応やサインを促すための働きかけのことである。

入所児者個々はそれぞれの特徴をもつことから「入所児者個々に応じた声かけや体に触れている」ことが必要となる。また、必要に応じて「同じ働きかけを繰り返している」ことで反応やサインが表出されやすいことも考えられる。時には状況に応じて「反応やサインを促すための工夫をしている」ことも必要となる。

## 2.4 アセスメントの準備

「アセスメントの準備」とは、入所児者が表出する反応やサインが、どのような場面で、どのような働きかけをした際に、どのような表出があったかをアセスメントするために、入所児者のあらゆるところを注意深くみることである。

視覚的に捉えられることとして「表情、うなずき、目線、発語、体の動きなどをみる」がある。その他にも「心拍や酸素モニターなどの数値をみる」ことがある。また、入所児者の多くは表出に時間を要することもあることから、支援者からの働きかけのあとに「表出や反応を待てる」ことも重要な実践の一つとなる。

## 2.5 留意点

「留意点」とは、入所児者が表出する反応やサインを捉える、またはアセスメントする際に、留意すべきことである。

入所児者は、その時の体調や気分、環境によって、反応やサインの表出に変化をもたらすことも考えられる。そのため、「常に同じ反応や表出ではないことを意識している」ことや「普段と違う反応がないかを意識している」ことが重要になる。

## 2.6 判断

「判断」とは、これまでの入所児者への「働きかけ」から「アセスメントの準備」、「留意点」などの時間軸の流れから、支援者がどのように入所児者の反応やサイン、またはその意味を判断しているかということである。ここでは、特に、入所児者の反応や

サイン、その意味を明確に捉えることが難しい場合の判断とする。

支援者としては「自ら得ている情報をもとに判断している」、「実践経験をもとに判断している」、「自らの基準や尺度で判断している」ことなどが考えられる。また、例外的ではあるが、深く考えることなく「漠然と判断している」ことも場合によってはあるのではないかと考える。

## 2.7 個々の特性

「個々の特性」とは、支援者は入所児者のもつ特性や力や強みはどのようなものであるかといった視点で捉えることである。

支援者は「ストレングスの視点で捉えるようにしている」ことや「できることを見出す」ことによって、入所児者の反応やサインをより促すことができたり、捉えることができたりすることが可能となる。また、療育活動も含め、入所児者と「個別にかかわる時間をもつようにしている」ことによって、入所児者の特性がより一層理解できたり、みえたりすることにもなる。

## 2.8 情報共有

「情報共有」とは入所児者に関する情報に対して、例えば、支援者が入所児者の反応やサイン、その意味をどのようなプロセスで、どのような考えで判断したのか、根拠も含めて職員間で共有することとする。

入所児者の反応やサイン、またはその意味を明確に捉えることができない場合に、支援者自身が難しさやわからなさを感じることもある。そうした場合に、単に入所児者に関する情報を共有するのではなく、支援者自身がどのように判断をしたのか、考えたのかといったプロセスや根拠を他の支援者に伝えることにより、さらなる情報のすり合わせが可能になる。そこで「自らの考えや思いを職員間で共有している」、「わからないことや迷いはその日のうちに職員に聞いている」、「判断プロセスを職員に伝えている」、「他の職員の考えや意見を聞いている」ことが必要になる。

## 2.9 記録

「記録」とは、実践に活かすことができる記録のことである。

重症児者施設では、多くの専門職がかかわっていることから、入所児者の多くの情報を得ることになる。そのため、記録を残すことは、入所児者の財産にもなる。そのため、「表情や体の動きなどの具体的な様子を記録している」、「判断した根拠を記録している」、「実践に対する自らの所感を記録している」、「わからないことを記録している」、「入所児者の特性について記録をしている」ことが必要となる。

表1 入所児者の反応やサインを捉える実践の評価指標

大項目	項目	チェック
専門職としての心得	入所児者をかけがえのない存在として捉える	
	入所児者の意思を尊重する	
	本人の思いを中心に置く	
	入所児者の望みを知っている	
かかわる前の情報収集	電子カルテから収集している	
	施設独自の記録物から収集している	
	口頭（申し送りなど）から収集している	
	収集した情報に疑問をもつようにしている	
働きかけ	入所児者個々に応じた声かけや体に触れている	
	同じ働きかけを繰り返している	
	反応やサインを促すための工夫をしている	
アセスメントの準備	表情、うなずき、目線、発語、体の動きなどをみる	
	心拍や酸素モニターなどの数値をみる	
	表出や反応を待てる	
留意点	常に同じ反応や表出ではないことを意識している	
	普段と違う反応がないかを意識している	
判断	自ら得ている情報をもとに判断している	
	実践経験をもとに判断している	
	自らの基準や尺度で判断している	
	漠然と判断している	
個々の特性	ストレングスの視点で捉えるようにしている	
	できることを見出す	
	個別にかかわる時間をもつようにしている	
情報共有	自らの考えや思いを職員間で共有している	
	わからないことや迷いはその日のうちに職員に聞いている	
	判断プロセスを職員に伝えている	
	他の職員の考えや意見を聞いている	
記録	表情や体の動きなどの具体的な様子を記録している	
	判断した根拠を記録している	
	実践に対する自らの所感を記録している	
	わからないことを記録している	
	入所児者の特性について記録をしている	

済生会重症心身障害児(者)施設版

## 第3章 まとめ

本報告では入所児者の反応やサインを捉える実践における評価指標を生成し、提示した。この評価指標の作成を通して、福祉専門職による入所児者の反応やサインを捉える実践の中身が可視化されたことが明らかになった。

今後は、作成した評価指標を実際に実践者に活用してもらい、フィードバックを得ながら、必要な修正を行い、より精緻化させていきたい。

## 謝 辞

評価指標の作成および検討にあたって、2020年と2021年にインタビュー調査を受けてくださった11名の調査協力者とともに実施をしました。ご多忙の中、評価指標の作成および検討において貴重なご意見やご助言をいただきましたことに深く感謝申し上げます。

## 文献一覧

- 1) 吉田護昭：入所児者とのかかわりを通して職員が抱える「わからなさ」に関する研究. 令和3年度研究報告書, 済生会保健・医療・福祉総合研究所, 1-31, 2022.
- 2) 吉田護昭：重症心身障害児（者）施設に勤務する福祉専門職による入所児者の反応やサインを捉える実践過程. 川崎医療福祉学会誌, 31, 2022.（発刊準備中）

入所児者の反応やサインを捉える実践の評価指標の開発  
令和3年度 研究報告書（概要版）

---

令和4年3月

社会福祉法人 恩賜 財団 済生会  
済生会保健・医療・福祉総合研究所  
研究員 吉田護昭

〒108-0073  
東京都港区三田 1-4-28 三田国際ビル 26 階  
TEL : 03-3454-3315  
FAX : 03-3454-5022  
Email : m.yoshida@saiseikai.or.jp